

調査報告

トロス主教座聖堂発掘報告(二〇一五)

—考古学・建築上の知見から—

浦野 聡

キーワード

ビザンツ 聖堂 モザイク 内陣 祭壇

二〇一五年夏、トロス主教座聖堂発掘チームは、八月二日から一九日まで、聖堂北翼廊床上の堆積土を除去し、モザイク舗床の保存作業を行った。また、平行して八月五日から一二日まで、北翼廊第一室に存在した四基の墓の発掘を行い、記録し保存した(図1)。床面の意匠については、テデスキの調査報告に、また動物骨については松崎の調査報告に、それぞれ詳細を譲り、本稿では、北翼廊に関する考古学上、建築上の新所見を主として記すこととする。

1 北翼廊概観

北翼廊は、後代に設置された仕切り壁1・3により第一室・第三室までの三部分に分かたれている。一年の発掘では、第一室に壁体に沿って四基の祭壇状の構造物(祭壇A・B・C・E、ただしBについては後述)を、また第二室に、巨大な石柱の礎石を天板に転用した独立の祭壇状の構造物(祭壇D)をそれぞれ認めた。一三年の祭壇D周辺の床面の発掘では、第二室床面がテッセラモザイクで舗装されていたことを確認した。これまで遺構・遺物が認められていなかった第三室では、一五年の発掘でも、構造物は見出されず、遺物も、多数の動物骨(松崎論文参照)のほ

かは、わずかにガラスランプの破片多数とランプ吊具の鎖四点、また用途不明の金属製小円盤一点、同じく用途不明の石材断片を数点回収したにとどまった。以下、最も豊富に得られた**第一室**についての知見から順にしるす。

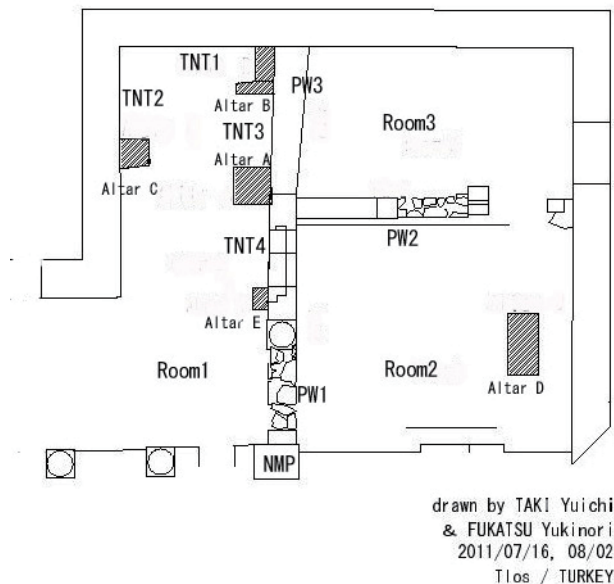


図1 北翼廊

2 第一室

第一室床上の堆積土除去の結果、北外壁に沿って北翼廊**第一号墓**(TNT1、以下**北一号墓**と略記)を、**祭壇C**の直下、北側に北翼廊**第二号墓**を(TNT2、以下**北二号墓**と略記)見出した。一年には**祭壇A**のそれぞれ北側と南側で人骨を取り上げていたが、一五年、これらが墓であったことを再確認し、それぞれ北翼廊**三号墓**(TNT3、以下**北三号墓**と略記)と北翼廊**四号墓**(TNT4、以下**北四号墓**と略記)と名付けた。

墓と仕切り壁の造作 **第一室**の元々の床は、とりわけ**北一号墓**の南側、**北三号墓**の西側で、地震、ないし支持土流失のため高低差一〇cmほどの撓曲を見せており、**北一号墓**と**北三・四号墓**を造作した際、瓦磚を敷いたり、漆喰を載せたりして床面の水平を確保しようとした形跡をとどめている(写真1・3)。その一方、**仕切り壁3**(PW3)は、遮蔽物のない第三室側からよく確認できるように(写真2)、まず撓曲した床面からモザイクを剥ぎ取り、煉瓦・礫石をモルタルで固めて水平の基部を作ってから、その上に煉瓦や転用石材を積んで築かれていた。また、**北三号墓**の敷石と壁面の隙間を埋めるために用いられた煉瓦列を固定するモルタルは、写真4ではやや確認しづらいが、**仕切**

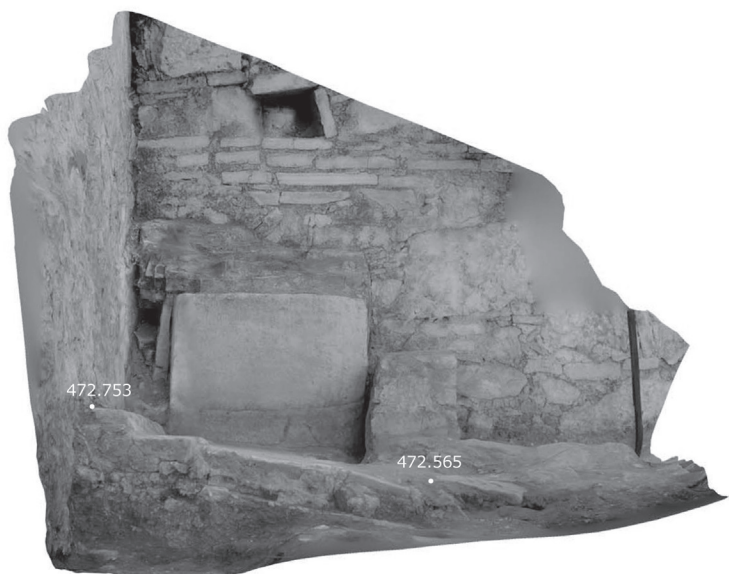


写真1 北一号墓と仕切り壁3（オルソ補正後：西→東。数字はレヴェル）



写真2 仕切り壁3（オルソ補正後：東→西）



写真 3 第一室（オルソ補正後）



写真 4 北三号墓と仕切り壁 3（西→東）

り壁 3 の基部のモルタルと連続していた。これらの事実、仕切り壁 3 と北一号墓・北三号墓が、聖堂の北翼廊北半部に広く影響を及ぼした床面のある時期（直後か、暫く後のことかは不明）、第一室を他と区別された空間、すなわち墓所とすべく、一体的・計画的に設置・築造されたことを示しているだろう。

北一号墓は、舗床モザイク上に分厚いモルタルを盛って築かれているのに対し、北三号墓、北四号墓は



写真5 第二室西辺の空洞（敷石列全幅に沿って続いている）

モザイクを剥がして転用材の石板を敷き詰めた上に築かれていた（北二号墓については後述）。そうした違いの生じた理由は必ずしも明らかでないが、北四号墓の東側の第二室では、仕切り壁1を支える敷石列に沿って南北方向に長大な空洞ができてしまっており（写真5）、第一室でもそのようにしてできた空洞に土を充填した上で新しく墓の

床面を造作すべく敷かれたものであったかもしれない。ともあれ、そうした空洞の有無にかかわらず、北四号墓の西側には瓦塼が広範に敷かれていて、元々の舗床モザイクに大きな損傷のあったことが明らかであり（後述）、その箇所に接する北四号墓での石板の据え付けは、床面の補修と関連していた可能性が高い。

北三号墓と北四号墓の敷石は、それらの西縁を直線上に揃えて据えられるなど、一貫した設計思想を示している。特に、最も外延にある四号墓の敷石の幅が、祭壇Aの幅や三号墓の幅（やや狭幅の敷石と、仕切り壁との隙間を埋める煉瓦列で構成）の規準になっていることは、部屋の内から順次設置されていった墓に同じ設計原理が適用されたというよりは、同一の時期の一体としての墓室築造にそれが適用されたということを示しているだろう。しかし、こうした推定によるなら、北四号墓の背面を形成する仕切り壁1の北半部（写真6。これを以下、仕切り壁1aと呼ぶ³）が仕切り壁3より薄く、またその造作も後者よりはるかに粗雑であるという事実が設計思想との関連で整合的に説明されねばなるまい。実際、これらの事実が、一年の発掘報告で、前者は後者よりのちの時代のものではないかと考えた根拠になっていた。



写真6 仕切り壁1aと祭壇E（遠景は祭壇C）

改めて様々な知見を総合しながらこの点を考量してみると、一年の発掘報告では重視しなかった、柱礎より北の部分の仕切り壁1aが、南の部分の仕切り壁1bよりも薄く作られているという事実が注目される。1bは、3と同じ厚さで敷石列の幅いっぱいには作られているのに、1aは敷石列上、西寄りに二〇〜三〇%薄く、積み方も精緻さを欠くのである。このことは、1aが技術水準に劣る時代の築造であることを示しているとは限らない。すなわち、それは仕切り壁3や1bとは異なる目的を持って設置されたかもしれないからである。仕切り壁1aは腰高ないし胸高の、北四号墓背面を形成することのみを目的に作られた壁体で、仕切り壁としては、仕切り壁3や1bとは異なり、ただ不完全に第一室と第二室を分けていただけなのかもしれない。仕切り壁1a、1bともに現存部が少ないので、壁体による第一室と第二室の仕切り方や二つの壁体の役割について確実なことは言えないが、仕切り壁1aの薄さと粗雑さでは仕切り壁3ほどの高さまで積み上げられていたことは期待できず、それは部屋の仕切り壁というよりは、北四号墓の後郭壁として作られたとする推測に分がある、と今は考えている。以上の考量に基づき、作られた時期も仕切り壁3と同じ時期、北四号墓まで含めた墓室建設の枠組みの中で築かれたと考えたい。

祭壇 八〇cm内外の奥行と幅を持つ、**祭壇A**と名付けた構造物は**三号墓**と**四号墓**を分かち仕切り郭壁の役割を持たされているが、その上面の広さに鑑みて、それが死者記念祭祀のための祭器等の置台に使われ、祭壇としての役割を果たしていた可能性は高い。実際、後述のように**第一室**からは、単に断片というにとどまらない、中期ビザンツの彩釉陶器の実体的部分がいくつも見つかっていることもそうした推測を裏付けるだろう。**祭壇C**と**E**もしかるべき大きさの上面を持っているので、同様の機能を想定できる。

それに対し、**祭壇B**とした構造物は、実のところ、**北一号墓**の東端を画する大きな石板と、**北三号墓**の北端を画するレンガ積み仕切り郭壁がL字型に組み合わせられたものであることが明らかとなった。こうした構造物に祭壇の役割は想定しえず、最終報告においては名称を変更する。ともあれ、これらの構造物は、**北二号墓**との関係が不明確な**祭壇C**（後述）を除けば、いずれも墓の側郭壁を構成する構造物であり、墓の設置と同じ時代に築かれたものとみなしてよからう。

床 ここまで触れてきた箇所以外の床面については、**写真3**によく示されているように、三か所、モザイクがはがれ

ている部分が確認された。すなわち、①**祭壇C**の南、西外壁に沿って七〇cm幅で二m以上におよぶ長方形の部分、②**祭壇C**から東西方向に一m幅で二m長の長方形に近い不整形の部分（この部分は上述の、瓦埴で補修された**北四号墓**西側の部分にL字型に続く）、③**祭壇E**の南側、敷石列に沿って長径一八〇cm×短径八〇cmほどの楕円形の部分、である。

これらのうち、少なくとも①と③は、墓が設置されていてもおかしくない場所に位置する。とりわけ①は、やや狭幅とはいえ、直線状にきれいにモザイクを切り取られているので、墓にする計画が途中で断念されたものか、将来の墓設置に備えていたものが何らかの理由でそのまま放棄されたものかのいずれかであった可能性が高い。剥き出た土はおそらく版築土であろう、固い土質であった。③は、後述するように比較的やわらかい土質で、上述のように反対側に大きな空洞がある敷石列に沿った場所なので、沈下や土壌流失により壊れたモザイクを取り去り、新しく充填したものであったかもしれない。

②は、大きさの上では、墓一基分の範囲を占めるが、ここに墓を築いた場合、**北一号墓**へのアクセスが確保できなくなるので、この箇所の剥離の理由は別に求められよう。その理由を考える際、**第一室**床面モザイクが、大きく分け



写真7 モザイク上の火成変色痕（白線内）



写真8 モザイク上の火成変色痕（白線内）

て二つの箇所において火に焼かれた痕跡を残していることがヒントを与えてくれる。そのうちのひとつはこの②の剥離がある箇所の周辺から**北四号墓**の西の床面補修跡にかけてのモザイクであり（写真7）、もうひとつは側廊の延長上、**北大黒柱**から**北内部戸口2**に至る部分のモザイクである（写真8）。両者の間には際立った相違がみられる。第一に、前者の上には炭化土層は確認されなかったのに対し、後者には、**北内部戸口2**を通って身廊部にまで至る広い範囲にわたって、はっきりと炭化した土層が残っていた。第二に、後者の箇所からは動物骨やビザンツ中期の彩釉陶器の破片が現れているのに対し、前者からは見いだされなかった。最後に、前者の箇所ではモザイクが剥がれながらテッセラはいずこかに除去されてしまっていたのに対し、後者の箇所では、テッセラは戸口の前の一部分を除き、下地のモルタルの上しっかりと固着して残されていた。

これらの事実から、前者と後者では、火にさらされた時期に違いがあったと推定できる。前者の箇所では、おそらく、地震等で床面全体が歪んだ時期ないしその後、火災に見舞われ、モザイクが損傷してしまつたのであろう。**第一室**が墓室として新たに区画・再編成された際、剥がれてしまつたテッセラは、その他の瓦礫とともに除去され、その後、レヴェルを残している部分は下地をそのまま床面と

して用いる（②の部分）一方で、損傷が激しく穴のできてしまつたところには瓦礫を敷いて新たな床面を形作つた（**北四号墓**の西側の部分。ここでは床面の撓曲や陥没もモザイクの破壊に一役買っていたかもしれない）。このように考えれば、②の箇所ではモザイクが剥がれてしまつていことと、モザイクの残存部に火成変色痕がみられることの関連について整合的に説明がつく。

それに対して、後者の箇所では、**第一室**放棄後に、キリスト教の聖堂に敬意を払わない人々が、この周辺で焚き火を熾し、飲食をしたのであろう。一年の発掘報告で、北側廊のパラペットのいくつかに焚火の痕跡が残されていたことについて報告したが、この**北大黒柱**周辺もそのような焚火の行われる場所になつたものと考えられる。炭化層は、**北大黒柱**の北側、**第一室**の南東隅で、大黒柱から剥がれ落ちたと見られる漆喰の層の上にも観察されている（写真9）。**第一室**が墓室として使われていた際には、この部屋の壁面や構造物の表面にはふんだんに漆喰を用いてフレスコで装飾されていた痕跡が至る所に残されているが、炭化層と漆喰層の層位の順序は、ここで火を使つた時期が、大黒柱から漆喰が剥がれ落ちた後、しかるべき時間を経た時期であつたことを示唆していよう。



写真 9 モザイクと漆喰上の火成変色痕



写真 11 北一号墓被葬者の遺骸



写真 10 北一号室



写真 12 北二号墓（北→南）

以下、墓毎に発掘状況を記述していこう。

北一号墓 写真10に見えるごとく、この墓は、西側三分の一ほどが掘り崩されている。その部分から第一室の北西隅にいたるまで大きな穴が掘られ、その後埋め戻されていた。被葬者の遺骸はこの墓の上からは発見されず、頭蓋を含むいくつかの断片が穴の上に乱雑に置かれていた（写真11）。おそらく盗掘者の仕業と思われる。副葬品はわずかに青銅製の指輪とペンダントヘッドが見いだされたのみであった。



写真 13 北二号墓の蓋

北二号墓 この墓は、ほかの三つの墓と異なり、地中に設けられており、郭室は、祭壇Cの下にまで達していた（写真12・14）。不整形で粗雑な加工を加えられた石灰岩の蓋が被せられており（写真13）、被葬者の遺骸は、手つかずのままであった。すでに言及した北一号墓やこれから言及する北三・四号墓が盗掘に見舞われていることに鑑みれば、この点でも特異である。また、南一号墓の地下墓で見られたような、漆喰を塗られるなど丁寧な郭室の成形もされておらず、副葬品も現れなかった。これらの事実には照らせば、おそらく、この墓は、ほかの三つの北翼廊の墓や南一号墓



写真 14 祭壇C下の古い構造物

に比べて時代が下り、聖堂放棄後に属するものと思われる。

その一方、この墓の側板として用いられたであろうと考えられる、かなりの厚さを持つ大きな石灰岩の石板（二〇×一二〇cm）がすでに発掘前から地表面に突き出ているのが確認されていた（写真10左上手の白い石）。地下墓にそのような側板は不要なので、地下墓が掘られる以前、すなわち墓室としての**第一室**が機能していた時代、ここには床上に本来の**北二号墓**と称するべき墓が存在しており、それは**第一室**の北西隅にいたる場所を占めていたものと考えられる。現在、地下の**北二号墓**の北の端に埋め込まれている石灰岩の別の石板（三五×八五cm）は、幅も**祭壇C**とほぼ等しく、**祭壇C**とともに、本来の**北二号墓**の両端を画していたと推測される。元々の**北二号墓**の被葬者の遺骸は、北西隅の穴に埋められてしまったか、後述する**北三号墓**西側の床上で見つかった人骨断片のいくつかがそれであろう。

ところで、**祭壇C**の下からは、興味深い構造物が現れた。地下墓を作る過程で部分的に壊されているが、現存する聖堂以前の建築物の遺構の一部であろう（写真14）。この延長上、**北三号墓**の敷石の下にもこの遺構の一部と思われる石の列が確認されているので、ここでの知見と併せて下で検討したい。

北三号墓・北四号墓 これらについては、二〇一一年にす

でに発掘を終えているので、簡潔にのみ新知見を記すこととする。いずれの墓でも、副葬品は見いだされなかった。一年の発掘では、いずれの被葬者の遺骸も甚だしく断片化しており、また、骨の位置も攪乱した状態で見つかった。一五年の発掘では、これらの墓に収められていたと思われる遺骨の、おそらく別の断片を、これらの墓の西側の床上から見出した（写真15）。総合的に判断すると、やはりこれらの墓も盗掘に遭い、遺骸は敬意を払われることなくかき回され、部分的に床上に投げ捨てられたのであろう。

一年の発掘の際、これらの墓の底面が、古代の排水溝の蓋などの転用石材であったことから、これらの石材の下には、より古い段階の墓があるものと予想していた。ところが、実際、これらの石材の一部を開けてみたところ、その下から墓は見つからず、その代わり、古い時代の遺構が見いだされた。**北三号墓**の中央寄りやや右手からは、おそらく**北二号墓・祭壇C**の地下から見つかった構造物の延長と思われる遺構が見いだされた（写真16）。もしこの遺構が**祭壇C**下の遺構と一直線を成していたとすると、現存する聖堂の軸線からやや時計と反対方向にずれるものと思われる。

北四号墓の敷石の下からは、地表面から約一〇cm下のレヴェルに、古いモルタル層が現れた（写真17 a・b）。黄色で、祭壇部の床下二〇cmから現れたものと似ている。表面には、セクティールモザイクの跡も残しているように



写真 15 北三号墓西の床面の人骨

見受けられ、昨年度に得られた知見とも合わせ、考えると、現存聖堂の以前の聖堂のものと推測される。北三号墓の敷石下から現れた構造物や祭壇C下から現れた構造物との関係が問題となる。北



写真 16 北三号墓敷石下の構造物



写真 17a 北三号墓敷石下の状態



写真 17b 北三号墓敷石下のモルタル

三号墓の地下に見いだされた構造物の隣接面にはモルタルは現れず（写真16参照）、知見の現状では、関係は不明とせざるを得ない。

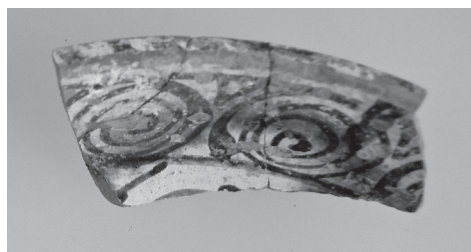
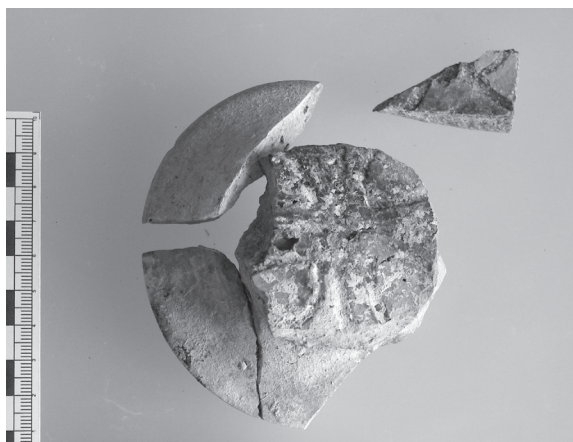


写真 18a-b 彩釉陶器（上 kil2015-0012、下 0015）

彩釉陶器片 第一室から見いだされた遺物の中で、特記すべきは、実体的部分を残したいくつかの彩釉陶器片である（写真18 a & b）。そのすべては第一室の南半分から出土している。いずれも祭器として使われたものと現状では考えているが、年代が一三世紀まで下るようなら、キャラバンによって運ばれてきたものかもしれない。今後の検討を期したい。

レリーフ付き石板 いくつか新たな断片が発見された。そのうち、少なくとも、R₂-13a-dとナンバリングした断片は、一一年に見つかった二群のレリーフ付き石板と、元々は一体のものであり、復元すれば、少なくとも横二二〇cm、縦九〇cmの巨大なものとなる（写真19）。下部が斜めに加工され、美しい飾り浮彫が施されているので、この石板は、もともとどこか上の方に飾られていたものとみられる。その大きさからして、聖堂の正面入り口だったであろうか。

なお、一一年の報告では、こうした石板は墓の側板に転用されていたものと推測していたが、細かい断片は、床の補修にも用いられたようである（写真15参照）。



写真 18c-d 彩釉陶器（上 kil2015-0027、下 0006）



写真 18e-f 彩釉陶器 (上 kil2015-0033、下 0026)



写真 19 レリーフ付き石板

3 第二室

この部屋については、すでに一三年に東半分の堆積土を除去し、モザイク面を明らかにしており、既述したような敷石列沿いの長大な空洞についてのほかは、とりたてて報告すべき点は少ない。**仕切り壁2**の南側の段差はモザイクの上に掛かっていることから、後から取り付けられたものであるのは明らかだが、この部屋からも遺物は動物骨若干以外出土しなかったので、その用途については不明とせざるを得ない。身廊Ⅱ祭壇部との間の南西隅の通路は、昨年報告した、身廊側からの穴が続いていた。この穴についても、新たに得られた情報はない。モザイク舗床は痛みが激しいが、修復の跡は見られなかった。一三年の発掘で意匠は明らかなので、できるだけ触らず、そのままジオテキスタイル等で保存を図った。

4 第三室

この部屋についても、本稿冒頭に書いたごとく得られた情報は少ない。床面は北東隅と中央付近で痛みが激しく、前者では**写真21a**の↓の箇所で二五cmも陥没があり、後者では、モザイクが剥がれていた。中央付近のモザイクが剥げた箇所の周囲のテッセラについては、**写真21**



写真 20 第二室（オルソ補正後）



写真 21 第三室（オルソ補正後）



21a 第三室（西→東）



写真 22 長柄燈台の破片

の白線で囲んだ部分に火成変色痕がみられた。この部屋からも動物骨は多数出ているので、後代の焚火の跡である可能性もあるが、モザイクが剥がれた部分のテッセラが残っていないことから考えれば、聖堂を襲った火災の跡である可能性が高い。あるいは火災と焚火、両方が原因となって残された痕跡かもしれない。なお、写真21の✕の位置から、鉄製の長柄の燭台を刺した穴に、その破片が刺さったままで見つかっている（写真22）。

検討と中間のまとめ

一五年の発掘では、一一年と一三年の発掘以来、墓室の床上に設えられた墓の築造法や墓室の構造が明確になったことが重要な成果である。ゲミレル島第三教会や、最近発掘の進んでいるパタラの主聖堂のような海岸沿いの教会でも、ビザンツ期の墓が聖堂床上から床下にかけて、作られていたことが明らかになっている^④。しかし、それらとトロスの聖堂南北翼廊の床上墓は、築造の方法や経緯が異なる。すなわち、ゲミレル島やパタラ主聖堂内の墓が、いささか場当たりのに床面上に堆積

した瓦礫や土を床下に達するまで掘り込み、そこに郭室を作つて、いわゆる「キスト墓」の形で死者を埋葬したものであるのに対し、トロスのそれらは、上に述べたように、墓室全体の設計計画の下、床の直上に何らかの死者崇敬用の設備とともに郭室を作り、そこに埋葬したものであつた。前者は、聖堂が放棄されて遙か後、聖堂の再建を伴わず、かつての聖堂の床上に死者を葬りその魂を慰めようとするものであつたのに、後者は、聖堂当該部の使用中、ないし聖堂全体の再建の一環として、聖堂内に墓室（あるいは礼拝堂か）を作り、そこに複数の墓を設置して死者を祀つた（そしておそらくは死後祭祀も継続して行つた）という点で決定的な違いがある。どうしてこのような違いが生まれたのであろうか。その理由について、以下、不明なところの多いビザンツ中期におけるリキアの主教座聖堂の消長・再編という、より広いコンテクストの中に置いて、さしあたりの知見をもとに考えてみることで結びに代えたい。

まず、私たちが発掘を行つてゐるトロス主教座聖堂（以下、この建築物を下で述べる浴場の教会と区別するため、「トロス主聖堂」と呼ぶ）についてここまで知りえた、および推定しえたことをまとめてみよう。筆者は、一二年に身廊で出土したイコノスタシスのアーキトレーブ部材飾り文様の様式的特徴や、一三年に南翼廊床面直上から出土し

た一〇世紀末の金貨を根拠に、トロスの主聖堂の本格的再建の試みは、クサントス東教会における洗礼堂の聖堂への転用・改築の試み^⑥と同時代に属し、おそらく九六〇年代のクレタ島の回復が契機になつて着手されたものと考えてゐる（トロスにおけるこの改築は、テンブロンにイコノスタシスの障壁や列柱を設置するなど大掛かりで本格的なものと推定されるので、以下「主聖堂大改築」と呼ぶ）。クサントスの東教会はその後、火災を受けた後に焼け残つた部材を再利用して再建されてゐた形跡を残しているが、我々のトロス主聖堂においても、最終的な放棄の前に再崩壊と再々建の試みが、とりわけ身廊部と南翼廊部であつたと考えられる。すなわち、中期ビザンツの意匠を持つイコノスタシスのアーキトレーブ部材の幾つかと柱頭のひとつに再加工の痕跡が残されているし、イオニア式柱頭からビザンツ式柱頭に再加工中の部材が身廊に、また未加工の巨大な柱身部材が南翼廊にそれぞれ放置されてゐたからである。一一世紀中葉以降のテマ・キビュライオタイの役人の封緘が南翼廊の比較的浅い土層から見つかつてゐることも、それが同時代にその場所に落とされたにせよ、あるいは後に聖堂外から廃土とともに投げ入れられたにせよ、上述の一〇世紀末～一一世紀初頭の主聖堂大改築の試みが、再建の最後の試みではなかつた可能性を強く示唆していよう。

そして、建材が身廊と南翼廊に放置されていた事実には照らせば、おそらく、クサントスの場合とは異なり、トロスでは最終的な放棄以前に主聖堂再建が完了することはなかった。北翼廊は、その西面外壁の一部が今日も元来の高さを保っていることから推察できるように、ほかの部分とは一線を画し、聖堂主要部に崩壊を齎した事件の際も、比較的被害を受けず使われ続けたのであろう。補修の上、その一部が高位聖職者、ないし土地の有力家系の墓室に改造されて、一一世紀の間も継続的に利用されていたものと考えられる。

ところで、我々の聖堂から六〇mほど南にある古代の大浴場には、そのテピダリウムの北半部を身廊に、またカルダリウムをナルテックスに改変し、教会として用いていた形跡が残る。つい最近出版されたトロスの第一次発掘報告書によれば、浴場発掘チームは、そこから、一一世紀、コンスタンティノス八世からニケフォロス三世までの間（一〇二五～一〇八一年）に発行された貨幣の幾つかと、おそらく同時代の彩釉陶器の破片を数点見出し、隣接するフリギダリウムには五一基の簡易な墓の存在も確認した。⁹⁾これらの情報に鑑みるなら、一一世紀の第二・四半期以降、大浴場の教会が主聖堂に代わって、主教座聖堂の役割を担わされていたという蓋然性は高い。また墓の数の多さは、

むしろ、主聖堂大改築期間を含め、もっと長期間にわたって、大浴場の教会が主教座聖堂の機能を担っていた可能性も示唆している。

主聖堂大改築前後以降の情報はこのように比較的豊富に得られ、我々は、この時代のトロス主教座聖堂周辺の機能の実態について、ある程度の確からしさををもって再構成を試みることができる。主聖堂から大浴場にかけての範囲には、いつのものは特定しがたいが数十cmの厚さ、数mの高さの周壁がめぐらされており、その範囲内で、大浴場を含めたいわば複合宗教施設が、区画内の主聖堂の再建を伴いながら、少なくとも一一世紀の数十年間、機能していたものと思われる。主聖堂と大浴場の教会の間にあるクロノス神殿基壇周辺からは、古代末期の工房の跡であることを示す遺物やビザンツ中期のフレスコも出土しており、今後、主聖堂とクロノス神殿の間の区域が発掘されれば、この時代を超えた主教座聖堂関連施設についての我々の知見はますます豊かになっていくことであろう。

さて、このように明らかになってきた一一世紀のトロスにおける主教座聖堂をめぐる活発な動き―すなわち、単に主聖堂北翼廊の一部を墓室として用い続けるというだけにとどまらず、主聖堂全体を中世トロスの中心的施設と位置付けて一帯を再開発しようとしていたという動き―は、も

っと大きな歴史的コンテクストの中で評価することができ
るであろうか。そのような問いを立てたとき、我々の遺跡
から一〇世紀以前と特定しうる考古学的情報は少ないのだ
が、背景となる歴史的コンテクストについては、今日に伝
わる『主教座位階表 *Notitia Episcopatum*』における主
教座位階の順位変化に反映していると想定される政策的意
図や社会情勢から読み取られうるように思われる。そこで、
最後に、この表におけるトロスの地位の変化について最近
論じた草生久嗣氏の所見に触れつつ、以下、筆者の考えを
述べて本稿を結びたい。

草生氏は、トロスが、ミュラの大主教管内において、
九世紀の『第四表』から大きく改定を被った一〇世紀初頭
の『第七表』^⑩で、見かけ上その地位を上昇させているにも
かわらず、実際には低下させたと考えた。フアセリスや
オリンポスといったいくつかの上位の主教座が脱落したに
もかわらず、カウノス、クサントス、アカラツソス等に
追い抜かされているからというのである。氏は、その理由
を不明としながらも、トロスの主教座教会が少なくとも
一一世紀まで実態をもつて機能していたにも関わらずその
地位を下げられたと考えることから、これは当時の社会的
現実とは関連の薄い「正統」な「ビザンツ」世界^⑪像・
観の、いわば思想的「改定」の一環とみなしうるものと示

唆する。^⑫ 氏の関心は、異端の蔓延る中期ビザンツ時代、宮
廷人の心性や思想、イデオロギーというところにあるので
専門外の筆者はその結論の可否を論じるつもりはないが、
少なくとも、ミュラの大主教座管内の主教座の順位付け
と、トロスの位置づけの理解の仕方については、若干見解
を異にする。筆者は、いくつかの位階表（特に『第一表』
と『第七表』）には、現実の主教座管内の住民の数やその
主教座の司牧ネットワーク上、地政学上の重要性が位階の
順番に反映されているものと考えており、以下、すでに知
られた情報や、新たに読み取りうる限りのそれに照らして
筆者なりの理解を提示してみよう。

さて、表1・2として示したのは、それぞれ『第四表』
と『第七表』に現れる主教座を、(a)カサバ盆地周辺、(b)ク
サントス河谷、(c)エルマル高原、(d)沿海、(e)その他・不明
に分けて上位から順に並べた表である。両者の相違に目を
向けたとき、即座に気づかれるのは、『第七表』における
沿岸都市の目立った減少であろう。九世紀初頭段階の順位
を反映していると考えられる『第四表』^⑬は、少なくともミ
ュラの大主教管内に関しては『第一表』に示された七世
紀半ばの主教座の順位を基本的に維持しているが、『第四
表』から約一世紀のちの『第七表』で沿海部の主教座の幾
つかが消滅しているのは、急激に流動化した地中海情勢に

Myra 周辺	Xanthos 河谷方面	Elmali 高原方面	沿海	その他
2 Mastaura			3 Telmessos 4 Limyra 6 Aperlai 11 Sidyma	8 (Tata?)
12 (Zenonupolis?)	5 Araxa	7 Podalia 9 Arykanda	13 Olympos 15 Korydalla	
	14 Tlos	10 Arneai	16 <i>Kaunos</i> 20 <i>Markiane</i>	
	18 Xanthos 19 Bubon	17 Akarassos	25 Antiphellos	
23 Kandyba	21 Oenoanda	22 Choma	26 Phaselis	
24 Phellos			29 Lebissos	27 Rhodiapolis 30 (Akanda?)
28 Akalissos			31 (Palaioton?)	
32 Eudokias		34 Komba		
37 Meloeton		35 Nysa		
38 Kyaneai	36 Balboursa		33 Patara	

Myra 周辺	Xanthos 河谷方面	Elmali 高原方面	沿海	その他
2 Mastaura	3 Araxa	4 Podalia	5 Sidyma	11 (Hagiodula?)
9 Kyaneai	8 Xanthos	6 Arykanda	7 <i>Kaunos</i>	
	13 Tlos	10 Akarassos	12 <i>Markiane</i>	
14 Kandyba	15 Oenoanda	17 Phileta	16 Makre	
	19 Proine (Bubon)	22 Komba	18 Phoiniks	
24 Phellos	20 Balboursa	23 Choma	21 Patara	26 <i>Lornaia</i> 28 (Tergasos?) 33 (Akanda?)
29 Eudokias	27 Pinara	30 Nysa	25 Korydalla	
32 Meloeton			31 (Palaioton?) 34 Lebissos	

表 1（上）・2（下）4 と 7 に現れるミュラ大主教座管区の主教座
（数字は順位、イタリックはカリアの主教座を示す）

よるところが大きかったと考えられる。とりわけアラブ艦隊のロドスとミュラへの来襲(八〇七年)やクレタ島の喪失(八二八年)によるアラブ勢力による東地中海制覇は、海沿いの各主教座管区の信徒たちの恐慌を招き、とりわけ内陸部や、沿岸近くでも守備の堅い要地への移住を促したものと推定される。その結果、内陸部では、幾つもの城砦に守られた大主教座ミュラ¹⁶からミュロス溪谷を遡った、ミュラの肥沃な後背地をなすカサバ盆地のマスタウラ(ここには城砦もあつた¹⁵)と、この盆地を眼下に見下ろすカンデュバ、フェロス、あるいはキュアネアイ(後述)といった城塞都市が地政学的重みを増して、それらの主教座の地位が維持され、あるいは高められた。その一方、それぞれテマ・アナトリコンとテマ・トラケシオンへのルート上にあるエルマル高原とクサントス河谷の諸都市や、また、海に近いながら集落自体は険しい山中にひそむシデュマやロルナイアといった都市の重要性も高まり、その多くの主教座の地位も格上げされた。他方、沿岸部では、ロドス島の対岸に位置し、そこからの避難民の受け入れ先にもなったであろうカリアのカウノスとマルキアネーや、重要な港で造船の中心地であつたフォイニクスが実際に人口も増やした結果、前二者の主教座はその地位を引き上げられ、後者には、周壁を設けられたといえ防御機能の劣る平野

部のリミユラから主教座を移されたものと考えられる(図2参照²⁰)。

『第七表』における「ミュラ周辺」、「エルマル高原」、「クサントス河谷」、「沿岸部」の四地域における主教座の配置には、もしそれが実際の人口移動の結果を反映していたのならば、なんらかの計略や誘導があつたかとさえ思わせる絶妙さがある。主要な二四番目前後までの主教座は、四地域にほぼ満遍なく分布し(どこにあつたかわからない一位のハギオドウーラを除く)、沿海部からアラブの本格的な侵攻があつた場合、住民の避難にも、軍隊の防御・迎撃にも有利な重要拠点の主教座が格上げされている。他方、これが実際の人の移動の結果ではなく、将来構想としての配置であるなら、予想しうる限りの攻撃の危険を想定して、守るべきところは守り、引くべきところは引き、反攻の手順まで考えて綿密に練り上げられたそれといえるだろう。いずれにせよ、このような配置は、単なる主教座の権威上の順位というにとどまらず、ダグロンの言葉を借りれば、「多かれ少なかれ、帝国の新しい都市地理 urban geography であつた」²¹。

こうした都市地理の中におけるトロスの位置づけを秤量すれば、トロスより順位を上げられた主教座都市には、トロス以上の戦略的、地政学的重要性が備わっていたことが

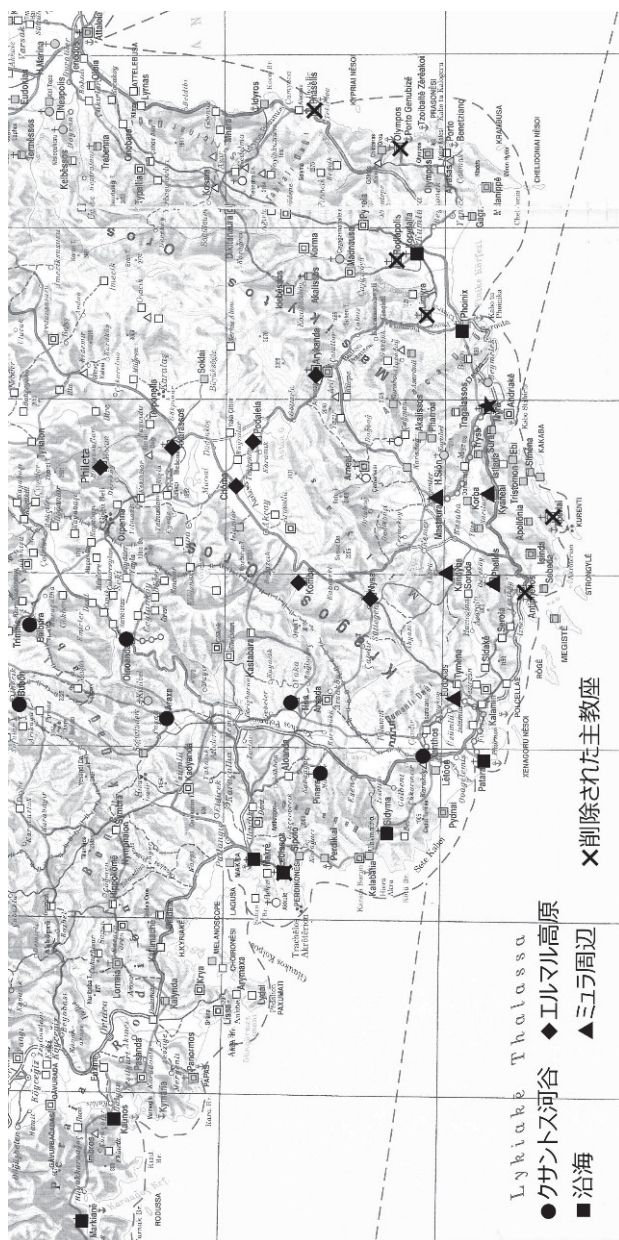


図2 「第七表」に現れるミュラ大主教管内の主教座

わかる。「沿海部」でテルメツソス(Ⅱマクレ)に代わって上位に位置付けられたカウノスとマルキアネーについては上述の通り、ロドスとの関係の重要性がそれらの地位上昇の背景に想定されるが、「エルマル高原」では第三位の主教座の地位は、高原の深部にまで人口の移動が起こった、ないし計画されたことにより、ミュラからエルマル高原に向かう経路上、やや外れた位置にあったアルネアイから、高原上のアカラツソスへと移った。アカラツソスは、偉容ただならぬエルマル山の山塊を北の背にし、やがて今日のエルマル郡の中心地エルマルへと発展を遂げていく都市であり、なによりそうしたその後の歴史が、この都市の、この高原における戦略的重要性を物語っているだろう。

「ミュラ周辺」では、キュアネアイの地位の上昇が目立つが、おそらくそれは、「沿海」のアペルライとアンティフェロスの主教座喪失と関係している。すなわち、九世紀には、沿海部からの人々の避難や沿海部での海上交通の衰退により、ミュラとクサントス谷との間の交通はもっぱら陸路に頼ることになったと想定され、カサバ盆地方面に向かうルートとの分岐点近くに位置する山間の要衝、キュアネアイの地政学的重要性は、飛躍的に高まったと考えられるのである。キュアネアイには古代末期Ⅱ初期ビザンツの教会が三つ確認されているが(Kirche A, B, E)・中期ビ

ザンツ時代には、改変されたものを含め教会は五つを数えるようになり(Kirche A, B, C, D, E)・またキュアネアイの農村領域には幾つか小さな教会堂までも建てられた。この都市とその周辺領域は、カサバ盆地周辺の幾つかの主教座都市と並んで、沿海からの人口を受け入れ、ミュラやその周辺の城砦を経済的に支えたばかりでなく、そこに置かれた主教座教会は、住民の生活をキリスト教信仰の下に統合する重要な拠点として、その相対的地位を高めたものと考えられる。

「クサントス河谷」では、かねてより最上流に近いアラクサが、カリア・アジア方面(テマ・トラケシオン方面)へと向かうルート上の要衝の位置を占めており、主教座としての重要性も七世紀以来、一貫してこの地域の最上位を占めた。トロス²⁰はクサントス川下流からのルートと、クラゴス山系の南の裾野を周回しミュラからやってくるルートの結節点にあり、北はアラクサへと向かう経路上にあつて九世紀まではアラクサに次ぐ「クサントス河谷」で第二の地位を占めていたけれども、『第七表』では、クサントスの風下に付き、第三位に落ちる。これは、クサントス川西侧、リキアの西海岸から四・五kmの山中に潜むシディマが全体で第五位と大幅に格上げされたことや、同じくクサントス川西侧のピナラが新たに主教座に昇格したこと、そし

てまたそれまで沿海主教座最下位の地位に甘んじていた。パタラがにわかに地位を上げられたこと（といってもせいぜい二一位）と連動し、クサントスの交通上の結節点としての地位が高まったことを反映しているものと考えられよう。クサントスはクサントス川の兩岸を結び、沿海と内陸を繋ぎ、またミュラとクサントス河谷を連結する重要な要衝としての、かつての地位を取り戻した。そもそも、クサントスは古くからビザンツ初期にかけては広大な東教会を初めとして、アクロポリス上やアゴラの西にも大きな教会を持つなど、パタラと並んで周辺地域のキリスト教信仰の中心であった。七世紀から九世紀にかけての衰退の理由は不明だが、条件さえ整えば、トロスの風上に立つ資格は十分にあった主教座といえよう。考古学的にはつきりしていることは、おおむね同じ時期に再建されたと考えられるクサントスとトロスの、ビザンツ中期の主聖堂の建築部材を比較してみると、特にアーキトレーブの浮彫によく観察されるように、前者の意匠や細工が、キリストや聖母のメダイオンを刻まれるなど、後者のそれらよりずっと手が込んでいるということである。すなわち、投下資本・資源の違いは明らかで、このことは、クサントスとトロスの主教座としての格の違いが一〇世紀後半以降も明確に意識されて

いたことを如実に物語っている。浴場の教会を含め、二つしか教会の存在が確認されていないトロスは、もともと信仰ネットワークの拠点として重要度に劣るし、一一世紀以降は、私たちが上で述べたように、主聖堂再建の完成を見るまでに至らなかつた。最終的な放棄がいつのことか、特定できないとはいえ、一二世紀の『主教座表』に至るまで、一貫してクサントスの後塵を拝することになったのはこれらの理由によっていたものと思われる。

ここまで見てきたことから、九世紀を転換点として（実際にはもっと以前から変化は始まっていたのかもしれない）、リキア（とカリヤ南東部）の人口が沿海から内陸へ移動し、それに応じて戦略的に重要な内陸交通路の結節点がクローズアップされて、それらの主教座の地位も上げられたこと、そうした変化の中で、もともと内陸の重要な都市であったトロスは、他の、より重要な位置づけを与えられるようになった（ないし、回復した）都市ほどには人口や地政学的位置づけの大きな変化をこうむることなく、それに応じて宗教・信仰ネットワーク上の地位もさして上げられることはなかつた、ということが推察できる。

私たちのトロス主聖堂は、一〇世紀後半以降の大改築において、身廊スペースを用いるのみの単廊式のバシリカに変えられる計画であつたとしたなら、イコノスタシスの敷

石列の幅から推定されるように、一〇m幅に近い規模の建築物となることが目指されていたようである。これは、ビザンツ中期のパタラの聖堂(アプシスを除き幅九m×奥行一一・六m)や、同時代のクサントスの聖堂(アプシスとナルテックスを除き、幅八m×奥行一三m)に比して若干大きい。残念ながら、どの程度の奥行にであったか、今のところナルテックスの遺構が現れていないので不明だが、アプシスからイコノスタシスまで六m近くの隔たりがあることから考えて、パタラやクサントスの聖堂よりやや大ぶりであったと考えるのが妥当だろう。こうした規模の違いは、しかし、古代末期における聖堂間の規模の相違に比べれば些細であり、そこに何か意味を見出すことは、現段階ではできない。それに対し、建設場所については、意味のある違いが見られる。ビザンツ中期のトロスの主聖堂は、古代末期の主聖堂を改築再建しようとしていたという点でクサントスの場合に近く、限られた狭い城砦の中に新たに聖堂を建築したパタラの場合とは異なっている。ビザンツ中期、城砦外に位置したかつてのパタラ主聖堂には、側廊に小さな礼拝堂が設けられた他は、上に述べたようにその遺構の大部分は打ち捨てられ、ベーマにまで墓が築かれていた。おそらく、イスラム勢力の脅威にさらされていた沿海地域では、略奪の対象になりやすい教会や聖堂は、住民

の居住空間のただ中に、必要最小限の宗教的機能を備えて建設されるのが精一杯であったのに対し、内陸や山中の教会や聖堂は、比較的安全な地にあつて、可能な限り古代末期の栄光を偲ばせる形で、再建された(ないし、再建を計画された)ものと考えられる。当局や住民の関心の内陸へのシフトはこうした点にも観察しうると言えるだろう。

かつて辻成史氏は、ゲミレル島の諸教会の調査に際して、古代末期における海路を通じた活発な交易と巡礼の道の重要性に私たちの注意を喚起した。²³これに対し、時代が下つてビザンツ中期には、国際情勢の変化や人口流動の動きに応じて、沿海の領域は帝国の「フロンティア」となり、むしろ内陸路の重要な結節点での信仰拠点の再編・再建が急がれたのであつた。一〇世紀半ばのビザンツ皇帝コンスタンティノス七世ボルビュロゲニトスはその著『テマについて(Περὶ τῶν θεμάτων)』の中で、元来、海のテマとして出発したはずのテマ・キビュライオタイの範囲を、カリヤやリカオニア、イサウリアに至る内陸深くまでのそれとして記述した²⁴——その中ではトロスや、さらに北のオイノアンダまでもわざわざその名を挙げて言及している——が、そのことは、とりもなおさず、ビザンツ帝国の内陸国家への傾斜の側面を示しているものと解されうる。一〇世紀から一一世紀にかけてのビザンツ帝国の国勢回復はこのような

コンテキストの延長線上に置いて考えられるべきと、筆者は考える。そして、ビザンツ中期の諸教会建築と『主教座表』の精査は、改めてこうした政治的・社会経済的脈絡の詳細を知るために、有用な情報を与えてくれるであろうという見通しを示して稿を閉じたい。

註

- (1) 二〇一五年の参加メンバーは、科学研究費基盤 (B)「古代・中世地中海世界における宗教空間と社会変動―トロス遺跡聖堂遺構の発掘調査」メンバーから、代表者浦野の他、分担者深津行徳が、協力者から高橋咲、谷本めい、クラウディ・アニデスキ、アレックス・ドラ・コスタ (以上、モザイク調査・保存担当) が参加した。
- (2) 北三号墓と北四号墓は、一年の発掘報告においてはそれぞれ「一号墓」、「二号墓」と称していたが、南翼廊で見られ発掘された墓 (一三年の発掘報告書では四号墓とした) を含め、改めて呼称を付け替えた。これまでの「四号墓」は南翼廊第一号墓 (南一号墓) とする。
- (3) 仕切り壁 1 とした壁体は、側廊と翼廊を聖堂創建当初から分けていた敷石列上に築かれているが、円柱の柱礎から南側の壁体と、いまここで検討の対象にしている北四号墓の東の壁体では、本文に書いたように厚さが異なる。敷石列の幅いっぱいの厚さを持つ前者は後者以上に現存している部分が少ないので元々の高さも長さも推察できないが、両者は「仕切り壁 1」として一括りにできない別々の壁体であった可能性が高い。これが北半部の薄い壁体を仕切り壁 1 a とすべしと考えた根拠である。また、そうした呼称の付け替えに伴い、今後、南半部の厚い壁体は仕切り壁 1 b と呼ぶ。
- (4) H. Hellenkemper und F. Held, *Lykien und Pamphylien*, TIB 8, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2004. (以下、TIB8), S. 785 キスト墓の写真は、最近の発掘の報告書が未刊行であるので、ここでは掲載を控える。
- (5) S. Fukunaga, *Burials after the Abolition of Church III*, in: K. Asano (ed.), *The Island of St. Nicholas. Excavation and Survey of the Geniler Island Area, Lycia, Turkey*, Osaka Univ. Press, 2010, 75-82.
- (6) cf. J. P. Sodini, *Une iconostase byzantine à Xanthos, Actes du colloque sur la Lycie antique*, Adrien Maisonneuve, 1980, pp. 119-148.
- (7) Sodini, *art. cit.*, pp. 123-124.
- (8) 村田『史苑』二〇一四「三月」。
- (9) T. Korkut, *Arkeolojik Kalıntılar, in Arkeoloji, Epirografi, Jeoloji, Doğal ve Kültürel Peyzaj Yapısıyla Tlos Antik Kenti ve Territoriumu*, Seydikemer Kaymakamlığı Yayınları, 2015, p. 31.
- (10) C. Zuckerman, *Byzantium's Pontic Policy in the Notitiae Episcopatum*, in: Idem (ed.), *La Crinée entre Byzance et le Khaganat Khazar*, Monographies 25, Paris 2006 15. H. Geizer, *Ungedruckte und ungenügend veröffentlichte Texte der Notitiae Episcopatum*, Ein Beitrag zur byzantinischen Kirchen- und Verwaltungsgeschichte, Abhandlungen der k. Akademie der Wiss., I, XXI, III, München, 1900, S. 529-641 & Darrouzès, *Notice episcopatum ecclesiae Constantinopolitanae, texte critique, introduction et notes*, Institut Français d'études Byzantines, 1981 にある九〇一年から九〇七年までのずれかの年という通説的年代推定を退け、九二〇年以降の編纂とする。私見では、いずれも決定的とは言い難く、

一〇世紀初頭の成立としておくのがさしあたり最善であろう。ところで、近年の『主教座位階表』についての研究は、ズッカマンを初めてとして M. Jankowiak, *Notitia 1 and the impact of the Arab invasions, Millennium* 10-1, 2013, 435-461 など、これらの表の儀礼上の席次表とみて、教会会議の年代と結びつけて解釈する立場が主流である。筆者も、それらがセレモニアルな意味を持ったことを否定しないが、しかしゲルツァアの時代から教会会議の年代は十分よく知られていたので、かつての研究者たちが主教座表と教会会議の関連の可能性について考えなかったとはとても思わない。史料の年代決定と性格の問題は、慎重に扱うべきと考える。

- (11) H. Kusabū, *Ecumenical Orthodoxy and Heterodoxy in Post Late Antiquity*, in: T. Minamikawa (ed.), *New Approaches to the Later Roman Empire*, Kyoto University, 2015, pp. 167-169.
- (12) P. Komatina, *Date of the Composition of the Notitiae Episcopatum Ecclesiae Constantinopolitane* no. 4, 5 and 6, *3PBI* L, 2013, pp. 195-214 がアモリオンの地位に注目して Geltzer 説の復権を図り、八二〇年代から八三〇年代の作とした見解は説得的である。
- (13) このあたりの経緯については参照史料を含め TIB 8, S. 121-124。
- (14) N. Çevik and I. Pimouguet-Pedarras, *Les remparts du port d'andriake premiere campagne de fouille, Anatolia Antiqua* XIX, 303-319, 2011.
- (15) J. Morgenstern (ed.), *The Fort at Dereğzi and Other*

Material Remains in Its Vicinity: From Antiquity to the Middle Ages, Ernst Wasmuth Verlag, Tübingen, 1993.

- (16) マスタウラは『第四表』で *μικροῦ* に次ぐ地位を占め、そもそもがミューラ大主教座のバックアップの地位を占めていたから、険しい山中にあるミューラ周辺の教会や修道院とは違い、ミューラ川の刻む険しい谷の上流に位置した。第一位を占めるハギオドゥーラについては、TIB 8, S. 148, 156 は、『第四表』で名前が挙がっていたのに、『第七表』では落ちてしまったいづれかの都市が、まったく新たに加わった都市のいづれかとするが、明らかに経済的に栄えていることを以て新たに主教座に加えられたものとする。もし前者の場合には、『第三表』に一度だけ名前が挙げられているミューラ北方の *Tragalassos* や、さらにその北で、『第四表』まで継続して現れながら『第七表』から名前の消える *Akalissos* などが考えられる。いづれもヒザン中期の教会ないし修道院の遺構を残す。後者の場合には、同じくミューラ北方、八二二年に大使ガブリエルの名を冠した教会が再建されたことが定礎碑文から知られる *Karkabo* (今日の *Alakilise*) がそれにあたるかもしれない。
- (17) インドス川の西にあるカウノスは、他のカリヤ地方とともに、一三世紀後半のミカエル八世の治世初までヒザンツ帝国の手にとどまった。TIB 8, S. 616.
- (18) 六五五年には近海での「マストの海戦」でヒザンツ海軍がアラブ海軍に大敗北を喫し、七一五年には再びアラブ海軍がここに寄港している。ヒザンツの史料 (to *Zon. III* 218) では「船渠 *νέφυρον*」として知られる。TIB 8, S. 807.
- (19) TIB 8, S. 689 には「ミューラの西半部を囲う周壁の築造

トロス司教座聖堂発掘報告（二〇一五）（浦野）

が九世紀ないし一〇世紀のものと考えられること、しかしそうした措置にもかかわらずビザンツ後期の建築上の痕跡が残っていないので、ビザンツ中期からビザンツ後期にかけておそらく人口が減少したであろうこと、また人口は新たに主教座とされたフォイニクスに移動したであろうことが指摘されている。リミユラは港町フォイニクスの守備隊の駐屯地として城壁を備えることになったのかもしれない。現在、オーストリア隊が発掘を継続しており、成果を待ちたい。

(20) このほか、注目すべき点として、テルガスとハギオドウーラという所在不明の主教座のいずれかがファセリスにあたるのでなければ、ファセリスとオリュンポスの主教座廃止によって、リキアの東海岸にはアッタレイアからコリュダツラに至るまで主教座がひとつもなくなってしまったことが挙げられよう。この海岸がマシキュトス山脈と今日のサルチュナル山地によってリキアへのアクセスを二重に阻まれていたのでアラブの海からの来襲を恐れる人々が居住を断念したのか、戦略的に重要ではなくなったとして放棄されたものか。cf. TIB 8, S.122, 799.

(21) G. Dagron, *The Urban Economy, 7th-12th Centuries*, in: A. Laiou (ed.), *The Economic History of Byzantium: From the Seventh through the Fifteenth Century*, Dumbarton-Oaks, 2002, p.399.

(22) TIB 8, S.673-675.

(23) I.Markoç and S.Tsujii, Preliminary Report on the Excavations in Ölüdeniz, Lycia, by Fethye Museum, The Ministry of Culture, Turkey, during 1999-2004, *Al-Rûfîdân*, XXVI,

2005.

(24) Constantino Porfirogenito, *De thematibus*, ed. A. Pertusi, Biblioteca Apostolica Vaticana, 1952, 78-79.

（本学文学部教授）

In 2015 season, 1) opus *tessellatum* floors in **Room1-3** of **NT** were opened, swept and conserved (as to **Room2**, that of the western half remaining covered), and 2) four tombs (**TNT1-4**) in **Room 1** were (partly re-)surveyed (in accordance with this new numbering system, two tombs in **NT** having been opened in 2011 and labelled as **T1** and **2**, were respectively relabelled as **TNT3** and **4**, and **T4** in **ST** having been opened in 2013 was now named **TST1**).

In **Room1**, **TNT1**, **3** and **4** were observed to have been constructed on the bases of stone slabs, white mortars and/or brick tiles set on the floor along the outer wall, **PW1** and **3**. All had lost their lids and side panels fronting onto the room. They are thought to have been put up at the same time as **PW3** was set to divide **Room1** and **3**, and **Altars A-C** and **E** were constructed to constitute boundaries between the tombs. It certainly happened after the central part of **Room1**'s floor had sunken from the original level up to 30cm probably due to an earthquake or a soil flowage; the bases of the tombs and altars, and other patching materials (bricks and white mortars) were laid to make the rolling floor surface flat or at least smooth as far as possible, while the bottom of **PW3** was set to make its rubble-brick layers parallel to the new surface.

TNT1 was situated alongside of the northern outer wall of **NT**. While no human bones were found from the tomb itself, some fragments of human bones were discovered in a pit dug immediately to its west and/or under its western destructed part probably by tomb raiders. Only a small bronze cross was found in the pit. **TNT2** alongside of the western outer wall was discovered to have been entrenched under the floor level (ca.30cm), stretching southward up to beneath **Altar C**, with a raw of some substructure of a previous building (**SPB1**; see below) destructed. This tomb might have been dug only after the original tomb on the floor was removed or destructed, as it was roughly constructed and covered by a poorly worked large stone slab. Its inside seems to have been untouched until our excavation, though nothing but mortal remains was discovered. **TNT3** and **4** alongside of **PW1** and **3** had already been excavated in 2011 and brought us some parts of fragmentary human bones. This season we found many fragments of bones scattered on the floor in front of these tombs either on or under fallen panels and rubbles (many of panels had already been excavated in 2011 and some others were in this season. All are thought to have originally been chancel barrier panels and ornament ones to have been reused as lids and side panels of **TNT1-4**). These fragmental bones on the floor can be assumed as coming from the buried of **TNT3** and **4**, though cross-check of them is still needed.

As described in our previous reports, another two underground tombs had been believed to exist under these tombs' bottom slabs, as

some of slabs were obviously converted from the ancient covers of drain, but in fact any such tombs did not emerge. Under one of bottom slabs of **TNT3**, there was found a raw of another substructure of the previous building (**SPB2**), which must have been the extension of **SPB1**. While we cannot specify whether **SPB1-2** were base(s) of a pre-Christian building or that (those) of a previous church, we recognize yellowish white mortars (**YWM2**), quite similar to those found in the *bema* and the nave (**YWM**), 15cm below a bottom plate of **TNT4**, with their extension continuing to also 15cm below the mosaic floor sustaining **Altar E**. If we can admit that **YWM2** is the extension of **YWM**, we can surely say that the former are also those of the previous church and may be able to think of **SPB1** and/or **2** also as belonging to it, since the level of these structures is approximate to those of **YWM** and **YWM2**. **YWM2**'s surface was smooth and looked like showing impressions of tiles, which might represent those of the *sectile* pavement of the previous building.

As to the *tessellata* mosaics of **Room1**, though severely damaged, we could recognized two patterns; one, the extension of that of **Room3**, consisted of outer band (rosetta), inner band (dentis) and main carpet (pelta), and the other, the extension of that of aisle, consisted of the same bands and a geometric carpet. On mosaics around places where mosaics were lost extensively, there were recognized traces of fires. We cannot say whether they represent a fire disaster on the building or an open fire after the building had been abandoned. We also recognize extensive traces of fire on the mosaic floor around the **NMP** on and around which substantial fragments of middle to late Byzantine glazed pottery were discovered.

As to the western half of **Room2**, there are not many things to report. Mosaic floor, heavily damaged, was the extension of the eastern half's (see 2013 report) and its design was self-contained within this room. Tessellas used here are smaller than those in **Room1** and **3**, and the quality of the pavement were higher than that in the latter. Under the mosaic floor alongside of the western edge of this room, there recognized a quite long and wide void space formed. There were not found human bones at all.

As for **Room3**, there were discovered relatively well preserved mosaics with a design described above. In the central part of the floor there was a large space (with a circle shape of 1.5m diameter) where mosaics had been lost, and its eastern adjacent area there recognized trace of fire. From this room, except for several pendant chains, many fragments of glass lamps were found especially near **PW3**. They might have been put in three small windows on this wall. Here also no human bones.

Many animal bones, mainly of goats, sheep, cows and rodents, were found at the floor level especially in **Room2** and **3**, but not a few also in **Room1**. This fact may represent a situation that after the abandonment of the church these rooms were temporally used as cooking, dining and/or dump space by non-Christian people.